

聖書：使徒 27：27～44

説教題：みな、無事に陸に

日時：2014年10月19日

いよいよローマに向かって出発したパウロの船は大変な状況に投げ込まれました。クレテ島の海岸に沿ってピニクスまで行って冬を越そうとしたところ、突然山から吹き降ろして来たユーラクロンという暴風によって岸から引き離されてしまいます。航海が危険なこの時期に沖へ投げ出されたら、もはやなす術がありません。太陽も星も見えない日が幾日も続き、「私たちが助かる最後の望みも今や断たれようとしていた」と記されるほどの状況に投げやられました。しかし人々がみな色を失い、絶望に覆われる中で、パウロ一人が違った姿を見せていました。彼は人々に「元気を出しなさい！」と言い、「あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。」と言います。そして、私は御使いによって告げられたその通りになると神によって信じています、と告白しました。果たしてその結果はどうだったのでしょうか。

14日目の真夜中ごろ、水夫たちはどこかの陸地に近づいたように感じました。水の深さを測ってみると40メートルほどでした。もう少し進んで測ると、今度は30メートルほどでした。パウロは26節で「私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます」と語っていましたが、確かにその兆候が現れて来たのです。そこでこの夜中に間違っただ暗礁に乗り上げることがないように、錨を降ろして朝までその場に停泊することにしました。その時でした。何と水夫たちが舳先から錨を降ろすように見せかけて小舟を降ろしていたのです。彼らは船に乗っている人たちを見捨てて、自分たちだけ助かろうとしていたのでしょうか。パウロは急いで百人隊長や兵士たちに言います。「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません。」

ある人はここを読んで、こう思うかもしれません。「パウロは神によって我々は誰ひとり失われない、と言った。であるなら『あの人たちがいなければ助かりません！』などと叫ぶのは、矛盾していないだろうか。神に信頼していると言いながら、これでは人に頼り過ぎていることにならないだろうか」と。しかし聖書が示す神の絶対主権の教えは、私たち人間の責任を排除するものではありません。神が救って下さるのだから、我々はただ寝ころんで待つていれば良いというのではないのです。確かに神が救ってくださいます。しかし普通に考えたら、水夫たちを失うことは、この船にとって危険なことです。彼らは海のこと、船のことを良く知っている人たちです。その彼らに船にとどまってもらって、きちんとその働きを担ってもらうことは、神の導きを待つ上で当然必要な準備

です。そのことをわきまえないで、神が救ってくださるのだから、人間がどう動こうが関係ないと言ってなすべき努力を怠ることは神を試みる罪とさえ言うべきではないでしょうか。パウロは神の主権を忘れて「あの人たちがいなければ助かりません」と言ったのではなく、神の主権に心から信頼しつつ、同時にそこで果たすべき人間の役割を正しくとらえて、このように懸命に叫んだのです。神の主権により頼む人は、同時に自分にできることを必死に行なう人でもあるのです。

もう一つ、注目すべきパウロの言動が33節以降にあります。夜が明けかけたころ、人々に食事を勧めた言葉です。「これであなたがたは助かることになるのです」と彼は言います。陸が近くに迫って来ているこの日は、いよいよこの船の運命にとって重大な日となるはずですが、パウロは全員が無事上陸できるであろうことは主の御言葉によって確信していました。しかしそこに至るまでにどんな困難が待ち受けているかは分かりません。それを乗り越えて生き延びるためには、まず食事を取って体力をつけておくことが必要だと考えたのです。パウロは信仰の人です。霊の人です。しかしだからと言って肉体に関することを軽んじていません。人間は靈魂と肉体からなっています。これからいよいよ最後の大事な時を迎えようとしている時、それに備えて肉体に栄養をしっかりとっておくこと、これもまさに信仰の行為なのです。神の約束を信じるからこそ、できる最善の準備をしておく。

同じようなパウロのアドバイスは、例えばIテモテ5章23節にも見られます。「これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。」パウロはここで信仰によって胃の不調や病気を乗り越えなさい、とは言っていません。もちろん神に祈ります。しかし神の導きを願うにあたり、適切な薬を用いることは信仰に反することではなく、両立することです。私たちは血肉以上の存在ですが、それでもやはり血肉です。私たちは単なる血肉だけの者ではありませんが、血肉も重要な部分として持つ者です。これを軽んじるなら、やがて霊的な働きも十分にできなくなるということさえ起こり得るのです。

パウロは一同の前で神に感謝をささげてから、率先してパンを裂いて食べ始めます。その姿を見ていたら、一同も元気づけられ、みなが食事を取りました。時々ここには聖餐式の象徴があるのではないかとされますが、ここには信者でない人たちもたくさんいたでしょうから、そういう意味はなかったと思います。しかしこれは嵐の中で食べることさえままならなかった人々にとって、何という祝福の時だったのでしょうか。何と一同がホッとして、体にも心にも神の祝福が注ぎ込まれる一時だったのでしょうか。嵐の中から救うという神の約束は、こうした人々の行動と矛盾しないのです。むしろこうして

食べることを通して、神の約束は実現するのです。

さて食事を終えて、いよいよ船は陸地に向かって進みます。まず彼らは残った麦を海に捨てます。また錨も切って海に捨てます。なるべく船を浮かせて、暗礁に乗り上げないようにするためです。そして砂浜のある入江を見つけて前進します。ところがあと一歩というところまで来た時に思わぬ事態が彼らを待ち受けていました。41 節：「ところが、潮流の流れ合う浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。へさきはめり込んで動かなくなり、ともは激しい波に打たれて破れ始めた。」 素晴らしい食事会を経て、ここまで導かれたなら、あとはスムーズに事は運ぶだろうと思ったかもしれませんが。しかし最後の最後までこのようなピンチは訪れ得る。そしてさらに悪い動きが起こります。兵士たちが囚人たちを逃がさないため、皆殺しにしようかと相談します。それはもし囚人たちを逃がしたら。監視役であった自分たちが代わりに刑を負わなくてはならないからです。陸にたどり着くまであと少しのところまで来たのに、ここですべてがパーになってしまうのでしょうか。しかしここで神の力強い御手が働きます。まず百人隊長ユリアスがあくまでパウロを助けようとして、兵士たちの計画を押さえます。彼はパウロの姿を見て来て、この人をここで殺すわけにはいかないと思ったのでしょうか。そのように彼に思わせるほどにパウロは立派なあかしをして来たということでしょう。しかし果たして一人の命も失われないという約束は実現するのか？人々は百人隊長の指示により、泳げる人は自力で泳いで、他の者は板切れやその他の船にある物につかまって岸に向かいます。どちらの道を選んでも途中で溺れたり、思わぬ事態に陥って岸にたどり着けない可能性もあったでしょう。しかしそれぞれの力に応じて、お互いに助け合って前に進んで行きます。まさにこの時、朝の食事が力を発揮したのではないのでしょうか。もしこの朝、食事を取らなかったら、生き残りをかけたこの最後の戦いで力尽きる者も現れたかもしれません。しかし彼らは十分食べていました。エネルギーを補給していました。その準備は確かに神が彼らを救うために用いた一手段となったのです。

27 章一番最後の節は「こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった」と結ばれています。以上の箇所が私たちに教えていることは何でしょうか。それはまず何と言っても、神の約束は必ず成就するということでしょう。それを妨げるように思われるいくつかの要因がありました。太陽も星も見えない真暗闇の悪天候が幾日も続きました。今どこに船がいるかも知ることができず、激しい暴風に翻弄されるばかりの状態にありました。そしてついにみながすべての望みを失うしかない状況がありました。こんなところからどうやって助かることができるのか？いのちを失う者はひとりもないなどということがあり得るのか？どこかの島に打ち上げられるというのは本当なのか？しかし 2 週間を

経て、確かに陸地が近づいて来ました。そして今日見て来たように、最後の瞬間にも思わぬ大ピンチがありました。ところが最終的に一人も失われず、276人全員の命が守られたのです。44節最後の「こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった」という言葉は、単なる事実を述べたものと言うより、まさしく神の約束通りであった！という感嘆の思いが込められている言葉でしょう。私たちも人生の中で様々な嵐に遭遇します。その中でこの時の船のようにもはや翻弄される以外にないと思われる時があるかもしれません。助かる望みもついに断たれたと思われる状況に至るかもしれません。しかしそこで私たちが頼ることができる確かなものがあります。それは神の御言葉です。この神の御言葉にこそ信頼を置いて、様々な嵐を乗り越えて行くようにとこの箇所は私たちに語っているのではないのでしょうか。

また合わせて思われるのは、そのように神に信頼して行動したパウロの姿です。人々が望みを失う中で、彼一人が望みをもって行動しました。その望みは神の御言葉が彼に与えた祝福です。そして彼は様々な準備をしました。神を信じるということは、人間は何もしないということではありません。神に信頼する者として、自分の責任を果たして行くのです。そしてその姿が人々を元気づけました。36節に「そこで一同も元気づけられ」とありましたが、なぜ人々は元気づけられたのでしょうか。36節から分かることは、それは彼らがパンを食べたからではないということです。彼らはパウロが食べる姿を見て元気づけられたのです。この状況でムシャムシャ食する彼を見て元気づけられたのです。それによって元気を得て、彼らもまた食事することへと向かった。もちろん食事を取ることによって一層元気づけられたことでしょう。そしてもっと突っ込んで考えれば、彼らはただパウロが食べる姿そのものを見て、元気になったのでありません。そうではなく彼が望みをもって食べる姿を見たからでしょう。彼は神に感謝し、神に信頼し、望みをもって食べています。その信仰によって食べている彼を見ていると、我々は本当に助かるのだ～という希望が彼らにも湧いて来た。そして食べる気力も湧いて来たのです。すなわち困難な状況でも主を信じて生きる姿が、人々に励ましを与え、力を与え、その救いにつながって行ったのです。私たちもそれぞれの遭わされている場で、このような働きができたらと願うものです。

私たちも日々、様々な嵐に遭遇するでしょう。しかし私たちは神の約束を頂いている者たちです。その神の約束こそ、すべてを越えて成就するものです。その約束に信頼して、望み得ない中でも望みを抱いて行動したパウロのようでありたいと思います。また、その私の生き方が、願わくは周りの人々に神を信じて生きる素晴らしさと力とをあかしするものでありますように。そして最後に「みな、無事に陸に」という約束の成就へと

導かれて、一切の栄光と賛美を神に帰す歩みへと進みたく思います。